社会学的想像力の現在*

――監視研究における「抵抗」の位置づけを手がかりに――

阿　部　　潔**

1. 個人／社会の現在

社会学とはいかなる学問であるか。この問いに対しては多種多様な答え＝応答が想定できるだろう。ありうる多様な答えに共通して見いだされる最大公約数的な論点を敢えて挙げるとすれば、それは「個人と社会の関係を問う学問」と言えるのではないだろうか。当たり前のことだが、社会学という知的営為は「個人だけ」でも「社会だけ」でもなく、「個人と社会」を研究の対象に据える学問である。もちろん、個人と社会の関係をどのように捉えるべきかをめぐっては、社会を「実体」として捉えるか「名目」として位置づけるかをめぐる論争に典型的なように、さまざまな立場が示されてきた。しかしながら、個人と社会を分析対象として切り離したうえで別個に論じるのではなく、その結びつき＝関係性の解明を目指すことが、これまでの社会学における根本課題のひとつであったと理解することは妥当であろう。

だがしかし、その課題は容易に解決できるものではない。なぜなら、日常的な感覚に照らせば明らかなように、個人と社会はその存在水準を異にしているし、その存立根拠も同じではない。だとすれば、両者のつながり＝関係性を解明するためには、社会学独自の概念・理論・方法が必要となる。つまり、何かしらの分析枠組みを介して眺めることによってはじめて、「個人と社会の関係」が認識対象として可視化されるのである。

本稿冒頭で「個人と社会の関係の解明」という社会学の教科書的な定義づけをわざわざ持ち出した理由は、以下の通りである。複雑さの度合いを強めていく現代社会の動向を踏まえたとき、はたして社会学は今日的な「個人と社会の関係」を十分に解明しえているのだろうか。そうした素朴な疑問を抱くからである。自戒の念も込めたこの問題意識を踏まえ、本稿では社会学的想像力（sociological imagination）の今日的な課題について論じる。周知のように C. W. ミルズが提唱したこの概念は、今では社会学における教科書的概念として定着している（井上・伊藤 2011）。その重要性は、社会学に携わるだれもが認めるところであろう。だが、想像力の向かう先である社会が異なれば（時間／空間的に）、そこにおいて有効な想像力のあり方も当然ながら異なってくることが予想される。だとすれば、それぞれの社会における個人と社会の独自なあり方を前提としたうえで、社会学的想像力の意義と課題が問われなければならない。

例えば、今日の日本社会の諸状況の特徴を考えるとき、一方における「個人の過剰」と他方における「社会の希少」を指摘することは、あながち的外れではないだろう。さまざまな社会領域において個人の自己選択・決定・責任が声高に唱えられるなか、現代社会に生きる私たちひとりひとりが、いやがうえにも「個人」であることを強いられる。従来は地域・集団・組織といった個人を超えた社会が担っていた分野においても、いまでは「個人」が主体して位置づけられる。そのことは他方で、多くの人々にとって「社会」がますます縁遠いものになることを意味する。自分にとつて大切で身近な対人関係（家族、友人、同僚など）

*キーワード：社会学的想像力、ポスト近代、監視研究
**関西学院大学社会学部教授

を超え出た領域における他者との関わりは、平穏な日々の生活を送るなかで絶対不可欠なものとは看做されていない。しかしながら、そうした個人の過剰／社会の希少は、必ずしも社会に対して個人が優越する状況をもたらしているわけではない。ある局面において私たちは、個々人を超えた位相に存在する「社会」の絶対的なまでの実体性を素朴に想定している。めまぐるしく変化する日本の政治状況に対して「だれがなにをしたって、結局世の中は変わらない」との意見が人々に広く共有されていることが、世論調査などの結果を踏まえて指摘される。世間に広まるシニカルな認識の背景に、社会の圧倒的な権力性の前で個人は無力に等しいと捉える見方が垣間見える。

こうした個人と社会の関係は、従来の大衆社会批判や私生活主義批判の文脈で指摘されてきた「大衆の姿」にほかならないと映るかもしれない。無知蒙昧なる大衆は自己の利益だけに汲々とするあまり、社会全体の利害や正義についての観点を欠き、もっぱら自分の私生活に埋没していく。そうした大衆像は目新しいものではない。だがはたして、現実は本当にそうだろうか。個人と社会の関係性をめぐる大衆社会論的な見方はジャーナリズムの言説を筆頭にいまだ衰えていないが、実際の社会状況はより複雑かつ微妙なものであると判断される。そう考える理由のひとつは、今では「大衆」と総称される当事者の多くが、メディア言説における大衆像を十分に自覚したうえで、それを敢えて自己像として受け入れているようにすら感じられるからだ。つまり、現在の「大衆」は社会における自らのあり方に対して無知蒙昧ではなく、それを自覚したうえで「敢えて」それと戯れている。だからこそ、その態度には「シニカルさ」が根深くついてまわる。以上のように考えることが受け入れられるならば、社会学的考察に求められるのは、個人と社会との関係をめぐる旧態依然の思考方法ではなく、今現在の時代における両者の複雑な関係を読み解く想像力であると言えよう。

本稿の以下の議論では、ミルズの「社会学的想像力」の内実を当時の時代状況に即して確認したうえで（2節）、その当時から今日に至る時代の変化を検討する（3節）。「近代」から「ポスト近代」への状況変化を踏まえたうえで、そのことが社会学的想像力に突きつける課題を明らかにする。そのうえで、ひとつの「事例」として近年の監視研究における議論状況を取り上げる（4節）。監視社会における「個人と社会の関係性」の一形態である「抵抗」の現状、ならびにそれに関する研究動向を批判的に検討することを通して、そこに見て取れる理論的難点を指摘する。最後に、今日的な社会状況を批判的に分析するうえで社会学的想像力に何が求められているかを展望する（5節）。

2.「社会学的想像力」という発想－理論・方法・実践－

チャールズ・ライト・ミルズ（Charles Wright Mills）は、その著書『社会学的想像力（The Sociological Imagination）』（Mills 1959）において、現代社会における社会学的想像力の有効性と必要性を唱えた。ミルズが提唱する社会学的想像力とは、彼が考えるあるべき社会学において必要不可欠な、批判的かつ社会科学的な認識を可能にする発想の仕方である。常識的にわかち持たれている認識とは異なる視座から、「いま／ここ」にある個人と社会のあり方を歴史的観点のもとに捉え直すことが社会学には求められる。それを可能にする認識方法が「社会学的想像力」にほかならない。失業、戦争、結婚、巨大都市を事例にミルズが説明するように、各人がそれぞれの人生おいて直面する個人的な問題（personal troubles of milieu）は、その個人が生きている現実社会における公的な問題（public issues of social structure）と密接に関わりあっている。しかしながら、多くの場合において人々は、そうした結びつき（linkage）を明確に認識しているわけではない。政治政策や経済状況といった公的な次元における諸問題が自分の日常的な境遇に影響を与えている事態に対して、なにかしら居心地の悪さ（uneasiness）を抱きながらも、その関連性は必ずしも十分に自覚されない。あるいは、そもそも不満や違和感さえ抱くことなく、自分の身の回りの事柄を超え出た社会領域に関わる問題に対して、つとめて無関心（indifference）を装ってしまう（Mills

1959 : 8–11)。当時のアメリカ社会に見て取れたそうした動向に抗してミルズは、人々の間に蔓延した uneasiness や indifference を乗り越えていく「人と社会（man and society）」についての認識に至るために、社会学的想像力が今まさに求められていることを指摘する（Mills 1959 : 13–18)。そこには、社会学という科学的営為に対する揺るぎない自負と大いなる期待が感じ取れる（Mills 1959 : 18–22)[1)]。

周知のように『社会学的想像力』は、冷戦期アメリカ合衆国の政治・文化状況への異議申し立てであると同時に、当時のアメリカ社会学に対する批判の書でもある。一方においてタルコット・パーソンズに代表される構造機能主義社会学は現実の社会状況から乖離した抽象概念をもてあそぶ「誇大理論（grand theory）」として批判され（Mills 1959 : 25–49)、他方でポール・ラザーズフェルドたちの計量的調査手法を用いた社会分析は科学的厳格性ばかりを追求する「抽象化された経験主義（abstracted empiricism）」として論難される（Mills 1959 : 50–75)。『社会学的想像力』において展開された手厳しい批判を通してミルズは、当時のアメリカ社会学の主流をなしていた二つの研究動向がともに、歴史的問題意識と道徳的コミットメントを欠いている点を鋭く指摘した。そこでは、当時（1950 年代）のアメリカ合衆国の政治・文化状況を所与としたうえで、自由・平等・多元といった諸価値を疑うことなく理論構築と調査研究が積み重ねられていた。そうした社会学の研究動向に対して、ミルズは根本的な異議を唱えたのである。

支配的な社会学への批判を行ううえでも、社会学的想像力が不可欠な位置を占める。なぜなら「誇大理論」や「抽象化された経験主義」は結果的に「自由な多元主義」というアメリカ社会のイデオロギーを正当化してしまうが、それに対抗して、現実社会における私（personal troubles）と公（public issues）の込み入った結びつき（intricately connected）と矛盾を浮かび上がらせるためには、個人と社会の関係認識に対する異化作用が求められるからである。そうした異化作用は、歴史意識に裏打ちされた想像力によって実現されるものにほかならない。社会学的想像力は、権力作用に満ちた実際の社会における「人と社会」の関係を的確に認識するための概念装置であると同時に、社会的な力関係が引き起こす個人と社会の間の亀裂を見えなくさせるイデオロギーへの批判を展開するための実践的武器でもある（井上・伊藤 2011 : 167–176)。

以上概観したように、ミルズが提唱した社会学的想像力という概念／発想は、学問的認識においても政治的指向性においても、きわめて批判的（critical）である。だからこそ、半世紀以上の月日を経た今日においても、その概念は批判的な社会学における重要概念として継承され続けているのだろう。本稿の問題意識に引きつけて言えば、ミルズは個人の次元（personal troubles）と社会の次元（public issues）とを切り離して別個に論じたり、予定調和的に結びつけるのではなく、特定の歴史的状況下において不可避的に生じる両者の緊張関係という観点から「個人と社会のつながり」を論じようとした。その際のキー概念が、社会学的想像力なのである。

社会学的想像力の必要性ならびにその担い手たる社会学に期待される政治・文化的使命を高らかに謳い上げるミルズの主張は、当時のアメリカ社会への鋭い批判を含んでいる。だが同時に、それは自由・平等・多元といったアメリカ的価値観にコミットしたうえでの批判でもある。つまり、既存のアメリカ社会への容赦ない批判は、理想としてのアメリカを根拠に為されている。「自由の国アメリカ」が掲げてきた本来の理念が、現実社会において実現されていない状況に対する道徳的憤りが、『社会学的想像力』をはじめとするミルズの一連の著作には強く感じ取られる（ミルズ 1957, 1969)。アメリカ社会への批判が、あくまでアメリカ的価値観へのコミットメントを前提に試みられている点は重要である。さらに指摘すべきことは、ミルズによる社会学的想像力をめぐる議論が、当時のアメリカ社会という歴史・地理的

1）『社会学的想像力』の冒頭章のタイトル ‘Promise’（約束）が、ミルズにとつて社会科学／社会学が人々に対して果たすべき役割が何であるかを端的に物語っている。

なコンテクストに内在して展開されている点である。圧倒的な軍事力のもとに政治的安定と経済的繁栄が保障されていた1950年代から1960年代にかけてのアメリカ合衆国の現実状況と照らし合わせることによってはじめて、ミルズが社会学的想像力を提唱した学問的かつ実践的な意義を十分に理解することができよう。「誇大理論」や「抽象化された経験主義」を批判する際に歴史的観点の重要性をミルズが強調することに倣っていえば、社会学的想像力を論じる際にも、それが唱えられる／求められる具体的な歴史状況を踏まえることが、なによりも肝要なのだ。

本節ではミルズによって提唱された社会学的想像力の内実を当時のアメリカ合衆国の状況との関連において概括し、その有効性を確認した。次節では、当時と比較した際に現代の社会状況にどのような変化と特徴が見て取れるかを論じる。その理由は、ミルズの社会学的想像力という概念／発想を引き継ぎながら、常にそれを歴史的文脈のなかに位置づけ直すことが必須だと考えるからである。そうした知的作業を通じて、今日的な「個人と社会の関係」を的確に描き出しうる社会学的想像力への糸口を探る。

3. 歴史のなかの社会学的想像力ーポスト近代という問いー

「アメリカの理想」というモダニティ

ミルズが『社会学的想像力』を記したのは1959年である。それは、彼が独自の社会学的想像力を発揮して批判的社会学の展開を試みた際に前提としていたのが、1950年代のアメリカ合衆国であることを意味する。1950年代のアメリカ社会の特徴は、第二次世界大戦後の東西冷戦期において、強大な軍事力に支えられた相対的安定を保持していた点に見て取ることができる。西側資本主義諸国と東側共産主義諸国とのあいだのイデオロギー対立によって色づけられた冷戦時代初期はアメリカ合衆国にとって、国内的には社会的安定と経済的繁栄を誇った時期として記憶されている。消費社会の成熟にともない物質的な豊かさは向上し、自由と平等というアメリカンドリームを多くの人々が素朴に信じられる政治状況が成り立っていた。その後1960年代には、「アメリカの理想」の内実に潜む矛盾が市民権運動や学生運動を通して根底から問い直されることになるが、激動の政治の時代は1950年代のアメリカ合衆国にはまだ訪れていなかった。むしろマッカーシズムに代表される反共主義に支えられた保守主義が、当時のアメリカ社会を特徴づけていた。この「アメリカの現実」に対抗して、ミルズが「アメリカの理想」の観点から厳しい批判を加えたことは先に述べた通りである。

ミルズが提唱する社会学的想像力は、多元主義を標榜するアメリカ社会に潜む権力関係を鋭く描き出すための道具であった。人々に共有されたアメリカ＝自由で平等な多元社会という虚構への異化作用を図るものとして、社会学的想像力が動員される。だが同時に、社会学的想像力が有効であるためには、批判の対象とする個人／社会の関係性に内在している必要がある。そうでなければ、想像力はミルズが批判する「誇大理論」や「抽象化された経験主義」のように歴史性を欠いた無味乾燥な一般論に堕してしまうだろう。その点でミルズ自身の社会学的想像力は、アメリカ的価値観である「自由な個人」と「多元な社会」に忠実にコミットしている。ミルズが依って立つアメリカの理想が実際には果たされていない（裏切られている）事態に対して、その約束（promise）を真の意味で実現することが社会学的想像力を用いた批判と実践の目標に据えられている。

以上のように、ミルズの『社会学的想像力』を当時のアメリカ社会の理想と現実をめぐる矛盾との関連で理解した。敢えてそれを図式的に要約すれば、ミルズ自身の社会学的想像力は、価値としてのモダニティを自明視したうえで展開されたと解釈できる。近代的な価値観である個人として確立した自己、ならびに自立した自己から構成される理性的に秩序だった社会という近代的な理想像は、ミルズの批判的社会学において比較的素朴に想定されているように見受けられる。社会との関係において居心地の悪さ（uneasiness）や無関心（indifference）に甘んじるのではなく、自立した個人（citizen）として公的な事柄（public issues）に関与していく人々の姿は、「アメリカの理想」が描き続けてきたデモクラシー像にほかならない。

ポスト近代社会の諸相

だが、モダニティの価値観を自明視した社会の捉え方は1970年代以降の社会学において、その規範性と現実性の双方において大きく問い直されてきた（ラッシュ1997）。「ポスト近代（Post Modern）」と形容される問題意識の広まりは、そうした事態を如実に物語っている。モダニティの価値観を批判的に継承すべきか、あるいは全面的に否定すべきかをめぐる論争は、個々の学者の価値観や政治的スタンスが関わるため容易には決着不可能な問いである（ハーバーマス1997/1999）。しかしながら、モダン／ポストモダンをめぐる党派性とは異なる社会科学的認識のレベルにおいて、現代社会が成立当初の近代社会と比較して大きく変貌した点に関しては、多くの研究者の合意が得られるだろう。ここでは社会学の領域におけるモダン／ポストモダンをめぐるこれまでの議論動向の詳細に立ち入ることはせず、社会学的想像力を用いた「個人と社会の関係性」の把握という本稿の問題意識に照らした際に重要と判断される、「近代」から「ポスト近代」への時代推移のなかで生じた個人／社会を取り巻く変化について概括する。

〈個人化の徹底〉

ポスト近代社会に生きる個人を特徴づけるのは、その過剰なまでの「個人化（individualization）」の徹底である（ベック、ギデンズ、ラッシュ1997）。マックス・ヴェーバーは近代における合理化の過程を「脱魔術化（disenchantment）」として理解した。近代的な合理化のもとで人々は、前近代的な思考や発想の軛から脱し、理性的な存在として解放される（ハーバーマス1986）。このヴェーバーの議論に倣って言えば、近代を特徴づけた脱魔術化は近代以後さらに進行した。その結果現在、理念としての「個人」の地位は外部のいかなる権威にも従属しないほどに絶対的なものと看做されている。つまり近代理性の担い手たる「自立した個人」であることは、経済・政治・文化のあらゆる領域において至高の価値として位置づけられる傾向が強まり、現実社会においてもそうした事態が生じている。例えば、所謂「ネオ・リベラリズム」が喧伝される今日の経済・社会生活において、さまざまな事柄に関する自己選択・決定・責任が声高に唱えられる。その背景に、ポスト近代社会における個人化の徹底を見て取ることは困難ではない。

ポスト近代における個人化の徹底は、モダニティの延長線上に位置づけられる（ギデンズ1993）。だが同時に、その徹底は近代的理念とのあいだに齟齬を生じかねない。『社会学的想像力』におけるミルズの議論に明らかなように、理想としての近代的な個人（理念としてのcitizen）は、自身の私事だけに埋没するのでなく、ほかの人々（自己と同様に「個人」として尊重されるべき他者）や政治・経済への関心と責任を抱く存在として想定されていた。つまり、等しく同様に「個人」として尊重されるべき人々は、自ら積極的に公的な関係を築き上げていく存在＝近代的な市民として考えられていた。だが、際限のない「個人化」は論理的にも現実にも、そうした社会的紐帯を弱めていく。経済市場において求められる徹底された個人化に端的に示されているように、ポスト近代における「個人」は他者との社会関係や規範的に裏づけられた紐帯を必ずしも指向しない。それ自体がなかば究極の目標・価値と化した個人化の論理の徹底は、モダニティの理念として素朴に想定されてきた他者との関係性を失効させかねないのである。

〈社会の液状化〉

これまでの社会学において近代社会とは、暗黙の前提として国民国家（nation-state）を意味するものと理解されてきた（ベック2003）。政治・経済・軍事における中央集権化された権威によって特徴づけられる近代国民国家は、そこに生きる個々人（市民＝国民）にとって確固たる／信頼できる（solid）存在として受け止められてきた。だが、近代国民国家の権威と実体は、現在の社会情勢のもとで低下している。グローバル化に関する諸研究が指摘してきたように、近代国民国家は自国市場における経済活動に対して、かつてのような排他的権威を保持することができない（ヘルド2002）。グローバル化した金融市場は国民国家の境界を容易に超え出ていくので、それを政治的にコントロールすることは、もはや一国の政府だけでは到底不可能である。だがそうした現実状況にも拘らず、少なくとも今現在の時点では、各国民

国家を超えた次元における排他的な権威を付与された政治単位＝上位国家は存在しない。各国民国家間での協調を通じてグローバルな経済市場への対応を図ることが、近年採られている主たる政治的方策である。経済との関係において旧来からの国民国家はその有効性を失いつつあるが、いまだ超国家的な権威によるグローバル市場のコントロールは成立していない。その結果、日常世界に生きる各人に影響を及ぼす社会の範域は一国民国家を超えてグローバルに広がっていくが、中心を欠いた「グローバルな社会」の実体は、個々人にとってますます捉えどころのないものへと化していく。

ジグムント・バウマンが「液状化（liquid）」という表現を用いて描き出そうとする現代社会の像は、確固たる中心を欠きながらも、同時にダイナミックに変貌を遂げていくポスト近代としての現代社会の姿にほかならない（バウマン 2001）。バウマンは、当初の近代社会が堅実（solid）であったのとは対照的に現代社会が移ろいやすい（liquid）ものである点を繰り返し指摘する。経済領域にかぎらず、政治・文化・社会のあらゆる領域において「液状化」が進んでいることを、バウマンは具体的事例を踏まえつつ縦横無尽に論じてきた（バウマン 2001, 2007, 2008、Bauman 2011）。バウマンの現代社会論を踏まえることによって私たちは、モダニティと比較した際のポスト・モダニティの特徴として、社会における中心性の欠落、ならびにそれに起因する移ろいやすさと絶え間なき変化を挙げることができる。

〈再帰性の高まり〉

一方で個人化が徹底され他方で社会自体が脱中心化されていく現代社会の特徴は、再帰性（reflexivity）の高まりとして議論されてきた（ベック、ギデンズ、ラッシュ 1997）。個人の存在のあり方が外部の権威や規範に確固として規定されている状況下では、再帰性は求められない。なぜなら、社会において個人がなにを期待され、どのように振る舞うべきかが予め明確に決められているので、個々人が既存の規範やルールに原則的に準じていれば秩序維持に関しては事足りるからである。しかしながら、ポスト近代における個人化の徹底は、そうした状況を大きく変えていく。その理由は、外部に根拠を待たないほどに自己目的化した「個人」が追求される社会では、各人が周囲との関係を常に自己モニタリングしながら自らのあり方を決定することを強いられるからである（ギデンズ 2005）。その結果、個人は自らのあり方（対自己関係）と他者との関わり（対他者関係）の双方において、常にその関係性自体を再確認しながら常なる再構築を続けねばならない。その意味で自己再帰性（self-reflexivity）の高まりは、個人化の徹底の論理的帰結である。

他方、液状化する社会にとっても再帰性が重要となることは容易に理解できるだろう。確固たる／信頼できるソリッド・モダニティの時代において、社会は個人に対する外部的権威として機能することができた。だがしかし、移ろいやすく、絶え間なく変化を遂げていくリキッド・モダニティの時代には、社会のあり方自体が常に問い直され、その時々の状況に即応するかたちで作り変えられねばならない。伝統や慣習に頼るかたちで社会秩序の維持を図ることは、ポスト近代の社会において益々困難になっていく。常なる変化を旨とする社会では、中心化された権威に基づく一元的な秩序形成ではなく、再帰性に準拠した脱中心化された多元的な秩序形成が常態と化していく。

アンソニー・ギデンズの「脱埋め込み（disembededness）／再埋め込み（re-embededness）」に関する議論は、近代からポスト近代への移行に伴う個人と社会の関係を取り巻く変化を図式的に理解するうえで有効である（ギデンズ 1993、ベック、ギデンズ、ラッシュ 1997）。ヴェーバーが脱魔術化として論じたように、近代社会はそれ以前の宗教的世界像のなかに埋め込まれていた人々を理性に基づき行為する近代的個人として解放（脱埋め込み）した。その結果、個々人は外部の権威に従属することのない「主体」として確立された。しかしながら近代化＝合理化のさらなる進展は、特定の文脈から脱した人々が寄るべなき存在として浮遊する事態を引き起こす。どこにも／何事にも根本的に係留されていないことに起因する「実存的不安（existential anxiety）」が、人々を悩ますことになる。その不安を解消すべく、近代化の過程において解放（脱埋め込み）された個人を再び特定の文脈に位置づける（再埋め込み）ことが試み

られる。グローバル化の進行にともない、人種・民族・宗教といった属性に基づく集団帰属が殊更に強調される昨今の風潮は、現代における「再埋め込み」の典型事例である。

しかしここで注意すべきことは、ポスト近代における「再埋め込み」は近代以前の埋め込み状態とは根本的に異なる点である。なぜなら、再埋め込みの過程は再帰的に為されているからである。つまり、特定の集団や文脈へと人々を再度埋め込む作業は、個人と社会の双方において自己再帰的に為される。それは、さしたる疑問を抱くことなく人々が所与の歴史・地理的文脈に埋め込まれていた前近代の状況とは、きわめて対照的である。さらに、実存的不安に苛まれる個人が再埋め込みされる文脈自体が、実のところきわめて移ろいやすいものでもある。例えば、グローバル化のもとで高まり見せる「ナショナリズム」を例にして言えば、そこでのナショナリズムは確固たる実体に保障されたものとは言いがたい。むしろ、再帰的に構築され続けることによってはじめて、「想像の共同体」（ベネディクト・アンダーソン）に自己再帰的に帰属する人々に「存在論的な安心（ontological security）」を提供しているように見受けられる（バウマン 2008 b、ホブズボーム 1997）。その点で、たとえ再埋め込みによる安定化が図られるとしても、そこでの個人と社会の関係自体は、再帰性に基づく流動的なものにならざるをえない。それは、以前の確固たる根拠に根ざしたソリッドな関係とは大きく異なる。

社会学的想像力の困難

以上のように個人化の徹底／社会の液状化／再帰性の高まりとして、ポスト近代と形容される現代社会の特徴を理解した。そのうえで、近代からポスト近代への移行にともない社会学的想像力に突きつけられる状況変化に関して以下の三点を指摘する。

第一に、個人の主観次元で抱かれる uneasiness の原因を客観次元における社会的要因に帰属させることは、以前と比べて困難になっていく。なぜなら、個人化の徹底により各人が直面する諸問題（personal troubles of milieu）がより多様なものになり、それらを特定の公的問題（public issues of social structure）との関連で一元的に捉えることは、理論的にも現実分析においても妥当性を欠くからである。その結果、今日的な社会状況のもとで人々の間に広まる名状しがたい不安は、それに対する社会学的な説明を欠いたまま、さらにその度合いを深めていくように見受けられる。

第二に、社会全体が液状化し、そこに生きる人々にとって俯瞰的な社会像を描き出すことが困難になるのに伴い、公的事柄に対する indifference が常態化していく。中心化された権威を欠いた社会では、各人が直面する諸問題の原因を社会次元において解明しようにも、そもそもの社会自体が流動的でとらえどころがない。その結果、多くの人々にとって「公的問題」は自らの日常とはかけ離れた、どこか遠くの世界の出来事のように感じられざるを得ない。そこでは公的事柄に対する無関心がその度合いを強めると同時に、そもそも無関心であることすら忘れ去られる傾向（「無関心である」こと自体の無関心化）が見て取れる。

第三に、再帰性が高まるポスト近代の政治・文化状況下では、各人の心理次元で感じ取られる不安や不満を解消すべく、その原因を分かりやすいかたちで外部要因に帰属させる言説が、より巧妙に提示される。例えば、グローバル化の影響のもとで雇用状況が悪化した多くの国や地域では、排外主義的な右派勢力によって「失業率の増加の原因は移民の流入である」との政治的キャンペーンが繰り広げられることが珍しくない。客観的な事実に照らしたとき、その因果分析はきわめて一面的で科学的根拠に基づくものとは言い難い。しかしながら、経済不況に喘ぐ失業者のあいだで排外主義的な移民政策が一定の支持を得ている現実がある（ホブズボーム 1997、ヤング 2007）。こうした例に典型的なように、再帰性が高まる今日の社会状況において、私的問題と公的問題は無関心のもとで分断されるだけでなく、ときとしてきわめて恣意的に接合される。そこでは個人と社会を結びつける「想像力」が確かに発揮されているが、その内実はミルズが提唱した社会科学的かつ批判的な思考とはほど遠い。むしろ現実の問題状況を隠蔽するという意味においてイデオロギー的である。

以上のようにポスト近代社会における個人と社会の状況変化、ならびに個人／社会の結びつきをめぐる想像力の条件を理解すると、かつてミルズが「アメリカの理想」に比較的素朴にコミットしたうえで批判的社会学を提示した当時と比較して、今日では私的な問題と公的な問題の込み入った結びつきを社会学的想像力のもとで明確に描き出すことが、より困難になっていると判断される。本節で論じた社会学的想像力を取り巻く今日的な状況を踏まえて、次節では現代社会の権力関係を分析対象とする監視研究の動向を事例として、社会学的想像力の課題について考える。

4. ポスト近代における抵抗－監視研究を事例として－

2001年9月11日にアメリカ本土を襲った同時多発テロを受け、その後の国際世界はグローバルな規模において監視の度合いを強めていった（ライアン 2004）。近年、北米を中心に学際的な研究が積み重ねられている監視研究（surveillance studies）は、そうした時代状況を反映した学問動向として理解できる。「監視」を共通の問題意識に据えたさまざまな学問領域（社会学、犯罪学、政治学、法学、心理学、等々）からなる共同研究を通して今日的な社会情勢の解明を目指す監視研究は、「いま／ここ」での社会を主たる対象とする知的実践として注目に値する（ライアン 2011）。本稿の問題関心である社会学的想像力に即して言えば、監視研究は「見ること（to watch）／見られること（to be watched）」を軸として、個人と社会の関係を探求する試みにほかならない。

だが注意すべきことは、監視研究自体は「9・11」の遥か以前から行われていた点である（ライアン 2011）。さらに、さまざまな研究業績が繰り返し指摘してきたように、今日見て取れるあらゆる社会領域におけるセキュリティの重視は、「9・11」だけをきっかけとして生じたものではない（ライアン 2004、Abe 2004）。むしろそれは、近代社会（国民国家）成立当初から一貫して指摘できるモダニティの特徴である（Giddens 1985）。その意味で「9・11」は、現在の監視強化を引き起こした直接原因ではなく、むしろ以前から存在した傾向を促進・活性化した要因として理解するのが妥当である。

本節の目的は、監視研究それ自体の動向を仔細に論じることではない。以下では、ごく概括的に近年の監視強化の特徴を指摘したうえで、それを受けてどのような「抵抗（resistance）」が社会において生じているのか、さらに監視研究はそれをどのように捉えてきたかについて論じる。今日の監視強化は、公的問題（public issues）と個人情報（personal information）の双方に密接に関連している（Lyon 2004）。その点で、個人と社会の複雑な結びつきを介して発揮されるポスト近代的な力関係を解明するうえで格好のテーマと言える。さらに、個々人による監視への抵抗の仕方それ自体が、きわめて「個人化」された現代的な特徴を示している。その意味で、今日的な社会学的想像力の困難と課題を示唆してもいる。以上のことを踏まえれば、監視への抵抗に照準した研究動向はポスト近代社会における権力作用を論じるうえできわめて重要であると同時に、そこに見て取れる理論的な問題と課題は、社会学的想像力の今日的な条件を考えるうえで有効な事例であると判断できる。要するに、監視という権力作動との関係において個人を論じることは現代的な「個人と社会のつながり」を明らかにする契機となるが、同時にそこには、従来からの概念枠組みでは必ずしも十分に把握しきれないポスト近代特有の複雑な関係性が見て取れるのである。「抵抗」をめぐる監視研究の理論的難点を明らかにすることが、本節の目的である。

セキュリティの至上命令化

「9・11」以後にグローバルな規模で生じた変化を敢えて一言で要約するならば、セキュリティ指向の際限なきまでの高まりであろう（Bigo and Tosoukala 2008 ; Gross 2006）。「テロの脅威（Terror Thereat）」と「テロとの戦い（War on Terror）」が声高に叫ばれるなか各国政府は、自国内ならび他国との関係双方においてセキュリティ確保に向けた諸政策を矢継ぎ早に推しすすめた。本来であれば十分な時間をかけた議論が必要とされる案件であっても、一刻を争うテロ対策が求められた当時の状況は「非常事態」あるいは「例外状況」と

して位置づけられ、そのもとできわめて短期間のうちに法制化が成し遂げられた。個人の自由やプライバシーの侵害が危惧される制度や政策であっても、いま現在は治安（public safety）と国家安全保障（national security）の確保が何事にもまして喫緊の課題であるとの認識にもとづき、それらが一気に導入・実施された（ライアン 2004）。緊迫した情勢のもとでなかばなし崩し的に監視強化が進行した点に、「9・11」直後の世界の特徴が見て取れる。各国の政治指導者たちは、セキュリティ確保のために自由やプライバシーなど個人の権利が制限されることは至極当然であるとの認識を競って示した。さらに政治指導者だけでなく大多数の国民もまた、「テロの脅威」がメディアを介して喧伝されるなか「テロとの戦い」に備えてセキュリティ確保を至上命令として受け入れたのである。

監視への抵抗実践

以上概括したように「9・11」を契機に、それ以前から進められていた監視政策が一気に促進され、グローバルな監視が急速に広まった。だがしかし、監視強化に対して疑問や批判の声がまったく投げかけられなかったわけではない。国境管理や入国審査の際に特定の属性（アラブ系・イスラム系の男性）を持つ人々が不当な扱いを受けることや、ごく普通に日常生活を送っている善良なる一般市民が警察の情報捜査の対象になることに対して「プライバシー侵害（violation of privacy）」の観点から疑問や批判が提示されてきた（Webb 2007）。そこでは、国家・社会のセキュリティ確保と国民・個人のプライバシー保護のあいだのバランスをどのように取るべきかが厳しく問われている。プライバシーを個人に保障された権利（right）とみなしたうえで、国家や企業による個人情報の収集・蓄積・分析・運用が個人に対する権利侵害を含んでいる点を批判する言説や運動は、「9・11」以前から連綿と続いていた（Bennett 2008 ; Bennett and Raab 2006）。「9・11」以後に監視強化が一気に加速化されたことを受け、プライバシー保護の観点から監視批判を試みる運動もまた、グローバルに展開したのである。

プライバシー理念に依拠した立場は、政府や警察による国民・市民の個人情報の取り扱いに潜むプライバシー侵害の危険性を指摘したうえで、国家権力や私企業による個人の権利侵害を法制度によって防ぐ必要性を主張する。本人の知らぬまに個人情報が第三者によって集められ、本来とは異なる目的のために利用される事態に対しては、少なからぬ人々が感覚的に違和や嫌悪を抱くであろう。監視強化への不同意表明に際して「プライバシーの権利」に訴えることは、監視に疑問を抱く人々のあいだで実感をもって受け止められてきた。その結果、プライバシー概念は監視を批判する理念的根拠として現在一般的なものとなっている（Bennet and Raab 2006 ; Zureik et al. 2010）。

しかしながらプライバシー概念は、監視研究の伝統において厳しく問い直されてきた経緯がある。研究者のあいだでは、プライバシー理念に準拠して監視を批判することの問題点と限界が指摘されてきたのである（ライアン 2011）。その要旨は以下のように整理できる。第一に、プライバシーは基本的に個人に関わる権利概念なので、社会次元における分析には不十分であること。第二に、プライバシーは近代西洋において生み出された政治理念（リベラル個人主義）に根ざしているので、特定の政治的党派性を帯びざるを得ないこと。第三に、近代西洋という特定の歴史・地理的コンテクストのなかで生まれたプライバシー概念は、その他の国や地域の政治・文化状況に必ずしも当てはまらないこと。以上の点が、プライバシー概念の限界として指摘されてきた。こうした批判を受けプライバシー理念に準拠する研究者による概念の更なる精緻化が試みられるなど、プライバシーは監視研究における重要な論争主題として位置づけられている[2)]。ただしここでは、プライバシー論争の詳細を述べることせず、一方でプライバシーを理念に掲げた監視への反対運動が生じているが、他方でその概念の有効性は学問的・理念的に問い直されている、とのプライバシーをめ

2）監視研究におけるプライバシー概念をめぐる論争に関しては、*Surveillance and Society* 8(4) 2011 に収録された諸論文を参照。

ぐる両義性を指摘しておくことに留めたい。

監視研究の領域では、プライバシー保護を掲げる運動以外の抵抗実践に関しても研究が積み重ねられてきた。とりわけデジタル・テクノロジーを用いた「対抗監視（counter-surveillance）」の具体的な実践例が検討されてきた経緯がある（Gilliom 2005 ; Koskela 2004 ; Mann 2004）。例えば、自らがビデオカメラで撮影した映像をインターネット上にアップロードすることは、現在ではごく一般的なメディアを用いた表現活動と化している。このことを監視の文脈に引きつけて理解すれば、カメラ映像による監視が国家や警察といった権力者（the powerful）だけの特権ではなく、ごく普通の人々（the powerless）にとっても可能になったことを意味する。デジタル・メディアの普及と利用の高まりを背景として、これまでの監視者を逆に監視する（to watch the watcher）実践が増えてきている。例えば、市民運動団体などがデモを行う際に、警察が参加者の情報収集を目的として写真や映像を撮ることが以前からなされていた（della Porta et al. 2006）。だが今日では、警察のみならずデモ参加者たち自らがビデオカメラを携えて、デモの警備に当たる警察官たちの姿を記録することが一般的になされている（Seneviratne 2010）。デジタル・テクノロジーの発達は国家や警察による国民・市民の監視をより強固なものにしたが、同時に同じテクノロジーが対抗監視の有効な道具として活用されてもいるのだ。その点でテクノロジーの進歩は、見る／見られる関係をめぐる監視に基づく権力作動において、きわめて両義的である（Kateb 2001 ; Kohn 2010）。

このように監視への抵抗の具体的事例を見てくると、社会のあらゆる領域において監視の導入と強化が図られる近年の状況のもとで、人々は権力側が差し向ける監視の眼差しに一方的にさらされるだけでなく、監視強化に対して異議を唱え抵抗する能動的な主体でもあることが確認できる。これまでの監視研究が示唆してきたように、監視社会のもとで発揮される権力作用に抗う行為主体（agency）の可能性を、そこに見て取ることは困難ではない（Koskela 2004）。しかしながら、抵抗実践に関する評価を下す際には、理論的により慎重になることが求められる。その理由は、本稿で論じてきたポスト近代における個人化の徹底／社会の液状化、それに起因する再帰的な個人と社会の結びつきを念頭に置くならば、主として個人の主観次元で実践される監視への抵抗（プライバシー保護／対抗監視）が、より構造的・客観的な次元においてどのような帰結をもたらしているかを冷静に検討することが求められるからである。そうした観点に基づき、以下では監視への抵抗に批判的な考察を加える。

抵抗の窮状

プライバシーへの脅威として監視強化を位置づけ、そのことへの注意喚起を図ることは、監視批判の文脈においてこれまで繰り返しなされてきた。その主張が人々にとって分かりやすく、実感として受け入れられやすい点は先に指摘した通りである。だがここで注意すべきことは、理念的権利としてのプライバシーが人々によって具体的に運用される多くの場合において、それが「選択の問題」として位置づけられている点である。つまり、個々人の「主体的」判断に基づきプライバシー侵害が懸念される場合には、監視への違和や嫌悪が唱えられる。だが、ほかの要素（経済的利益や社会的便益）を勘案し、そこから得られる利得が大きいと判断した場合には、人々は自らのプライバシーが危機に晒されることをさして厭わない。例えば、インターネット上で商取引やさまざまなサービスの提供を受ける際に、メンバーへの登録をウェブ上で強いられることが少なくない。その際に多くのネットユーザーは、自ら進んで自身の個人情報を第三者に提供する。その判断根拠は、メンバー登録によって得られる利得を優先するからにほかならない。個人情報を提供するか否かの判断が下される際の準拠点は社会的な正義や公平性の観点ではなく、あくまで「個人の選択」にほかならない。その意味で、プライバシーが「個人の権利」として唱えられるかぎりにおいて、その侵害の危険性とのトレードオフもまた、最終的には個人の判断に委ねられざるを得ない。自己選択に基づくプライバシー概念の受容と運用が「個人化の徹底」と強い親和性を持つことは、改めて言うまでもないだろう。プライバシー保護がたとえ法制度次元において保障されていたとし

ても、個人化された人々は自らの意思と判断でそれを放棄することが実際にできてしまう。

さらなる問題は、プライバシーをめぐる自己選択が、セキュリティが問われる現実の社会状況においてきわめて恣意的にならざるをえない点である。例えば、過去の犯罪履歴開示の可否をめぐる議論でしばしば見られるように、人々は自らのセキュリティ確保（誰が地域社会に住んでいるかを各人が知ることで、地域住民たちは安心して暮らすことができる）のために他者（過去に性犯罪歴等を持つ個人）のプライバシーが侵害されることを厭わない。本来的には法のもとで「すべての個人に平等に」保障されるべき権利であるプライバシーは、実際の社会状況では既存の力関係によっていとも容易に選別的に適応されてしまう。そこに個人化の徹底と結びついたプライバシー概念の危うさを見て取ることは、あながち的外れではないだろう。

プライバシー保護と並んで「見張る側を見張る」ことの重要性も、監視を規制する有効な方法として以前から主張されてきた。デジタル・テクノロジーの普及は、人々による権威の監視を簡便かつ効果的にした。そのこと自体は監視への対抗として大きな意義を持つ。個別具体的な場面を想定すれば容易に理解できるように、市民による「監視の目」を感じ取ることで、軍や警察は自らの行為をより厳しく律せざるをえない立場に置かれる。なぜなら、不適切な取り締まりの様子などが映像として記録されインターネット上に流布する事態になれば、自らの組織の正統性を問われかねないからである。その点で、対抗監視は権力による監視の暴走を阻止する機能を果たしていると評価できる。しかしながら、見る／見られるをめぐる国家権力と市民との関係は、依然として明らかに非対称である。ビデオカメラを用いた警察の見張り（policing the police）を例にして言えば、警察側はデモ参加者を写真や映像におさめることで得た個人情報をデータベース化し、爾後の警察活動に運用する。そこでは、さまざまなデータベース（国家・警察組織のものだけでなく民間企業のものも含めて）が互いに結びつけられ、それをもとにプロファイリングがなされる。データ分析を駆使した捜査活動のもとで、警察が入手した個人情報が実際にどのように用いられているかは、データとして記録・蓄積された当人（デモ参加者）には思いも及ばない（Monahan 2010–11）。それに対して市民側は警察官をビデオで監視することができたとしても、警察組織メンバーに関する膨大なデータベースを作成することなど現実的に不可能であろう。さらに、職務中の公務員のプライバシーはときとして「手厚く」保護されがちである。例えば、2010 年 6 月にトロント（カナダ）、2011 年 6 月にバンクーバー（カナダ）、8 月にロンドン（英国）と大都市での「暴動」が相次ぎ生じた際に、警察は街頭の防犯カメラに記録された映像をもとに「容疑者」を起訴することができた（*The Gurdian,* 26 Oct. 2011 ; *The Globe and Mail,* 3 Jan. 2012）。だが、ビデオ映像を証拠とした警察の不当な取り締まりへの市民側からの異議申し立てを受けて、国家行政がそのメンバーである警察官に関わる情報を市民側に自ら提供するとは到底期待できない（*The Globe and Mail,* 21 June 2011）[3]。その点を踏まえるならば、たとえ最新のデジタル・テクノロジーを用いた「監視の監視」が活発に繰り広げられていることが事実だとしても、それら諸実践が現行の監視強化に対する有効な対抗策となりうるか否かは、別問題である。なぜなら、互いに相手に対してビデオ監視を実践しているとしても、そこで得られたデータのその後の用いられ方が比較にならないほどに非対称だからである[4]。

これまでの監視研究ではともすると、メディア

3）2010 年 6 月のトロントでの G 20 に抗議するデモ隊への対応に際して、警察側は強行な大規模逮捕を実施した。その後、警察の不当な取り締まりに対する世論からの批判を受けて調査がなされたが、結果的に起訴された警察官は二名に過ぎなかった。

4）ときとしてデジタルテクノロジーを用いた「監視の監視」は「監視への協力」へと容易に転じる。警察による暴動等の容疑者捜査の過程において、街頭に設置された CCTV の映像記録に加えて一般住民が撮影した暴動現場の写真・映像の提供が重要な位置を占めていることに注目することが必要である。*Birmingham Mail,* 17 Nov. 2011 ; *The Globe and Mail,* 21 June 2011.

・テクノロジーを用いた個人レベルの対抗監視を楽観的に評価する傾向が見られた。だが、そうした行為体（agency）の評価が結果として、構造的な技術インフラ次元で作動する監視の権力作用を見えにくくしてしまうことが危惧される。デジタル・ネットワーク社会における監視や管理の様態をプロトコール（protocol）、コード（code）、アーキテクチャー（architecture）といった概念を用いて解明しようとする諸研究が指摘してきたように、インターネットに代表されるデジタル・メディアを介した監視の特徴は、個々の利用者の主観次元では容易に捉えられない位相において発揮される点にある（Dodge 2009；Galloway 2004；Lessing 1999）。そのことを踏まえるならば、監視への抵抗を評価する際にも、主体が自覚的に取り組む実践のみに目を向けるのではなく、コード化されたメディアを用いる際に不可避的に取り込まれざるを得ないインフラ／システム次元における「管理」（Deleuze 1992）との関連において、それがどの程度に対抗的かつ批判的でありえているかを検討することが不可欠である。

以上述べてきたように、監視研究における「抵抗」に関する議論には、理論的な難点が指摘できる。その原因は、個人の主観的な実践次元における監視への抗いが、技術的・構造的な次元における監視や管理の作動とどのような関係にあるか、を的確に論じるための理論枠組みが十分に確立されていない点に求められる。

5. アイロニカルな社会学的想像力に向けて

ここまでの議論で、ミルズの「社会学的想像力」を出発点として、それが提示された当時と今とを比較したときに「個人と社会のつながり」にどのような変化が生じたのかを論じた。ポスト近代における「私的問題」と「公的問題」の複雑な関係性を確認したうえで、監視研究における「抵抗」をめぐる議論を批判的に検討することによって、今日的な権力作動の特徴を明らかにした。最後に本稿冒頭で掲げた問いに立ち戻り、社会学的想像力に突きつけられた今日的な課題について論じる。

ポスト近代的な個人化の徹底と社会の液状化のもとで、「個人と社会のつながり」は錯綜した様相を呈している。それを十分に踏まえた社会学的想像力に求められることは、第一に個人／社会の関係性それ自体を問うことであろう。比喩的に言えば、「『個人』と『社会』」ではなく、「個人『と』社会」として両者の関係性を捉えることが肝要だと考える。その理由は、自己目的化の度合いを高めていく「個人」と中心を欠きますます液状化していく「社会」との関係は、どちらかを実体として措定した分析では十分に解明できないからである。つまり想像力を展開させる方向性として、「個人から社会」でも「社会から個人」でもなく「関係性それ自体」にあくまで照準することが、ポスト近代の社会学的想像力には求められる。

第二に、自己再帰性が高まるポスト近代において常態化していく「敢えて（knowing）何かしらの事柄にコミットする」事態を、社会学的想像力は出発点とせねばならない。ミルズが問題と看做した uneasiness/indifference に関しても、そうした視座から捉え直す必要があるだろう。もしも、実際の原因を知らずに（not-knowing）人々が居心地の悪さや無関心を抱いているのであれば、その状況を打破する有効な方法は近代的な啓蒙にほかならない。別の言葉でいえば、啓蒙の物語を通じて人々に「個人と社会のつながり」を知らしめる（蒙昧を解く）ことが、社会学的想像力の使命である。だがしかし、啓蒙を取り巻く今日的な状況は、きわめて自己再帰的である。人々は啓蒙の物語（どのようにして自分たちは「啓蒙されるべきか」）をわきまえたうえで、敢えてそれに背を向けたり、あるいは別の物語（ナショナリズム、疑似科学、新興宗教、等々）へと再帰的に自己コミットメントを図る。その意味で、近代的啓蒙という理念＝物語自体が再帰的な関わりの対象となり、そのほかのオプションと同様・同等な各人による選択の対象と化していると言えよう。ミルズにとって可能かつ妥当であったように、近代的な啓蒙の理念を前提として社会学的想像力を展開することは、ポスト近代の歴史状況下では適切とは言い難い。

第三に、さまざまな物語を介して個人と社会の結びつきが再帰的に紡ぎだされるシニカルな状況に内在しつつ、社会学的想像力は構想されねばならない。ミルズが当時のアメリカ合衆国における理想と現実の乖離のただなかから彼独自の社会学的想像力を展開したのと同様に、ポスト近代を対象とする社会学的想像力は「再帰化する啓蒙（reflexive Enlightenment）」を取り巻く矛盾（contradiction）に内在することが求められる。再帰的に敢えて選び取られた物語は、ある意味で「個人と社会のつながり」を人々に実感させる想像力に根ざしている。だがそれは、ミルズが提唱した社会科学的分析に基づく物語とは大きく異なる。個人化と液状化によって特徴づけられる現代において人々を惹きつけるシニカルな想像力とは異なる批判的な想像力が、今まさに求められている。

以上、三点にわたり社会学的想像力の「条件」を指摘した。それでは、具体的にどのようにすれば現代社会において批判的な想像力は可能なのだろうか。ひとつの提案＝プロポーザルとして「アイロニカルな態度に根ざした想像力」を提唱することをもって本稿を終えたい。

再帰性のかぎりない高まりのもとで人々がシニカルな態度に傾くとき、そこではひとつの「開き直り」が演じられている。なぜなら、敢えて何かしらに身を委ねることで少なくとも当座は、実存的不安や寄るべなさから解放されるからだ。シニカルな態度を取ることで人々は「個人『と』社会」について問うことから免責される。それは再帰性に基づく自己遂行的な開き直りにほかならない。それに対してここで提唱する「アイロニカルな態度」は、逃避的に何事かに依拠することなく、個人／社会の関係性をどこまでも問い続けていく姿勢を意味する[5)]。個人と社会の双方を実体視せず、あくまで両者の関係性のただ中において、現代社会の矛盾や暴力を問いただし続ける想像力。安易な「正解」にも無責任な「無回答」にもくみせず、再帰的に問いを問い続けることで「個人と社会の関係性」自体を意図せず反する（アイロニカルな）問いへと開いていく想像力。それこそが、今まさに求められる社会学的想像力の条件である。監視への抵抗の窮状が示すように、再帰的な権力作動は自らに反する勢力をも己の内に自在に取り込むほどに狡猾である。であるならば、シニカルな諦めでもオプティミスティックな熱狂でもなく、アイロニカルな態度をもって局地的な批判的実践を積み重ねることが切に求められる。それこそが、社会学的想像力が果たすべき今日的な約束（promise）であると考える。

引用文献

井上俊・伊藤公雄［編］（2011）『社会学ベーシックス別巻　社会学的思考』世界思想社

ギデンズ，A.（1993）『近代とはいかなる時代か？－モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房

ギデンズ，A.（2005）『モダニティと自己アイデンティティ－後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ハーベスト社

バウマン，Z.（2001）『リキッド・モダニティ－液状化する社会』森田典正訳、大月書店

バウマン，Z.（2007）『アイデンティティ』伊藤茂訳、日本経済評論社

バウマン，Z.（2008 a）『リキッド・ライフ－現代における生の諸相』長谷川啓介訳、大月書店

バウマン，Z.（2008 b）『コミュニティ－安全と自由の戦場』奥井智之、筑摩書房

ハーバーマス，J.（1986）『コミュニケイション的行為の理論（中）』藤澤賢一郎・岩倉正博他訳、未來社

ハーバーマス，J.（1997/1999）『近代の哲学的ディスクルスⅠ・Ⅱ』三島憲一訳、岩波書店

ベック，U.（2003）『世界リスク社会論－テロ、戦争、自然破壊』島村憲一訳、平凡社

ベック，U.、ギデンズ，A.、ラッシュ，S.（1997）『再帰的近代化－近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文・叶堂隆三・小幡正敏訳、而立書房

ヘルド，D.（2002）『グローバル化とは何か－文化・経済・政治』中谷善和・山下高行・国広敏文・高嶋正晴・篠田武司・柳原克行訳、法律文化社

ホブズボーム，E.（1997）『20 世紀の歴史－極端な時代』〈上巻・下巻〉河合秀和訳、三省堂

ミルズ，C. W.（1957）『ホワイト・カラー－中流階級の生活探求』杉政孝訳、東京創元社

5）ここでの「アイロニカルな態度」は，カントの『啓蒙とは何か』を検討しつつミシェル・フーコーが指摘した「態度としての啓蒙」からヒントを得ている。Foucault 1984.

ミルズ，C. W.（1969）『パワー・エリート』鵜飼信成・綿貫譲治訳、東京大学出版会
ミルズ，C. W.（1995）『社会学的想像力』新装版、鈴木広訳、紀伊国屋書店
ヤング，J.（2007）『排除型社会－後期近代における犯罪・雇用・差異』青木秀男・伊藤泰郎・岸正彦・村澤真保呂訳、洛北出版
ライアン，D.（2004）『9・11 以後の監視』田島泰彦・清水知子訳、明石書店
ライアン，D.（2010）『膨張する監視社会－個人識別システムの進化とリスク』田畑暁生訳、青土社
ライアン，D.（2010）『監視スタディーズ－「見ること」「見られること」の社会理論』田島泰彦・小笠原みどり訳、岩波書店
ラッシュ，S.（1997）『ポスト・モダニティの社会学』田中義久・須藤広・佐幸信介・清水瑞久・宮沢昭男訳、法政大学出版局

References :

Abe, K.（2004）‘Everyday Policing in Japan : Surveillance, Media, Government and Public Opinion’, *International Sociology* 19（2）：215–231.

Bauman, Z.（2011）*Culture in a Liquid Modern World,* Cambridge, UK : Polity Press.

Bennett, C.（2008）*The Privacy Advocates : Resisting the Spread of Surveillance,* Cambridge, MA : MIT press.

Bennett, C. and Raab, C.（2006）*The Governance of Privacy : Policy Instruments in Global Perspective,* Cambridge, MA : MIT press.

Bigo, D. and Tosoukala, A. eds.（2008）*Terror, Insecurity and Liberty : Illiberal Practice of Liberal Regimes after 9/11,* London : Routledge.

Deleuze, G.（1992）‘Postscript on the societies of control’, *October* 59 : 3–7.

della Porta, D., Peterson, A. and Reiter, H. eds.（2006）*Policing of Transnational Protest,* Aldershot, UK : Ashgate Pub.co.

Dodge, M.（2009）‘Code/Space : ’ *Science and the City* 1（2）：15–25.

Foucault, M.（1984）‘What is Enlightenment?’ in Rabinow, P. ed. *The Foucault Reader,* New York : Pantheon Books.

Galloway, A.（2004）*Protocol : How Control Exists after Decentralization,* Cambridge, MA : MIT Press.

Giddens, A.（1985）*The Nation-State and Violence,* Cambridge : Polity Press.

Gilliom, J.（2005）‘Resisting surveillance’, *Social Text* 83 : 71–83.

Kateb, G.（2001）‘On Being Watched and Known’, *Social Research* 68（1）：269–295.

Gross, O.（2006）‘What “Emergency” Regime?’, *Constellation* 13（1）：74–88.

Kohn, M.（2010）‘Unblinking : Citizens and subjects in the age of video surveillance’, *Constellations* 17（4）：572–584.

Koskela, H.（2004）‘Webcams, TV shows and mobile phones : Empowering exhibitionism’, *Surveillance and Society* 2（2/3）：199–215.

Lessing, L.（1999）*Code and Other Laws of Cyberspace,* New York : Basic Books.

Lyon, D.（2004）‘Public Issues and Personal Information : Risk, Fear, Safety and Surveillance in Contemporary Societies’, *Advanced Social Research* 1 : 321–336.

Mann, S.（2004）‘Sousvillance : Inverse surveillance in multimedia imaging’, *MM’04,* October 10–16 : 620–627.

Mills, C. W.（1959）*The Sociological Imagination,* New York : Oxford University Press.

Monahan, T.（2010–11）‘The Future of Security? : Surveillance Operations at Homeland Security Fusion Centers’, *Social Justice* 37（2–3）.

Seneviratne, M.（2010）‘Policing the police in the United Kingdom’, *Policing and Society* 14（4）：329–347.

Webb, M.（2007）*Illusions of Security : Global Surveillance and Democracy in the Post–9/11 World,* San Francisco : City Lights Books.

Zureik, E., Harling Stalker, L., Smith, E., Lyon, D. and Chan, Y. eds.（2010）, *Surveillance, Privacy and the Globalization of Personal Information : International Comparisons,* Montreal & Kingston : McGill-Queen’s University Press.

付記：本稿は 2011 年度学院留学期間（受入機関 Queen’s University, Department of Sociology）における研究成果の一部である。

The Present Condition of Sociological Imagination:

Surveillance Studies on Resistance

ABSTRACT

As is well known, the concept of 'sociological imagination' was coined in 1959 by C. W. Mills in his extraordinarily influential book *The Sociological Imagination.* While more than half a century has passed since then, that concept is still one of the most important terms in sociology. However, it is apparent that the sociopolitical context in which Mills engaged in his own critical research on contemporary American society is far different from those we now face in the globalized era of the 21st century. Keeping that in mind, it must be indispensable for those who inherit the work of Mills to reinvent the concept of sociological imagination so that it can appropriately embrace the present conditions of society.

In this paper, the author's purpose is to clarify what has changed since the publication of *The Sociological Imagination* with respect to the sociopolitical situation. After summarizing the characteristics of societal transition from modernity to post-modernity, the paper points out the predicament of sociological imagination at present. Focusing on recent research on surveillance and resistance, the author concretely discusses the theoretical tasks involved in reinventing sociological imagination so that we can shed critical light on the conditions of our society.

Key Words: Sociological imagination, Post-modernity, Surveillance studies